

パンを花にかえて

広島県 萬福寺 住職 高橋道英

私には、ゆきさんという金属造形作家の友人がいます。小柄なゆきさんが鎚で鉄を打ち、時に自分よりも大きな作品を作る姿は、力強く壮観でもあります。

ある日、ゆきさんから作品展の案内状が届きました。私はさっそく車を走らせ、森の中の小さな美術館に行きました。そして、その会場に入った瞬間、私は目の前に展示された一つの作品に心を奪われました。

ゆきさんは、自然から生まれたものを作品にします。それは森であり、樹であり、花であり、その生命を金属に吹きこむのです。そして、重く堅い鉄から、風にゆれるやわらかな花を表現していきます。これまでの作品は、ほとんど色を使わないシンプルなものでした。錆び色・黒、そこに少しの金色をのせる、そんな作品でした。しかし今回の作品は、美しい色が何色も使われていました。緑の葉から金色の茎が伸び、うす紫の花が咲き、花の中の蕊は銀色に輝いています。

その作品を目にした時、私は一目で心を奪われ手許に置きたいと思ったのですが、その値札を見て諦めざるを得ませんでした。その日から日を追うごとに、美しい鉄の花を手元に置きたいと思う気持ちが強くなっていきました。「あの美しい鉄の花が誰かの手に渡ったら、もう一生逢うことは出来なくなる…」ひと月悩んだ末、私は作品の

購入を決めました。

しかし、それまで散々悩んで決心したのに、決めてからも「これでよかったのだろうか」と迷いは尽きませんでした。コロナ禍で先行きが不安な中、こんな贅沢をしてもいいのだろうか…と、日々考え続けました。

そんな時、ある新聞の投稿が目に残りました。それは一人の女性が、亡き父の思い出を語った詩です。その中に「パンが二つあれば、一つは花に替えよ」という言葉が紹介されていたのです。この言葉に出逢い、私の悩みは一瞬にして消えました。ゆきさんの作品「鉄の花」を買って良かったと、心から思うことができたのです。

曹洞宗のお経に「愛語」という教えがあります。漢字では「愛で語る」と書きますが、「愛語」は人を導き、その生き方さえも変えてしまうのです。全ての生き物は、食べなければ生きていきません。それだけ大事なものです。しかしそれに加えて、美しいものを見、素敵な音楽を聴く、そのような感動もまた大事な事なのです。

ゆきさんの美しい鉄の花は、お寺にお参りになった方々に見ていただきたいと思います。多くの人の心を満たしてくれる一輪の花、お寺にお参り頂いた方々が、この花に心安らいで頂けることを願っております。